

発刊に寄せて ～「探究する学び」とは～

地域包括ケア研究所（探究総合アドバイザー）藤井 雅巳

Ⅰ 「探究する学び」とは

Ⅰ.1 人は誰も「学ぶ」権利をもっている

少し極端な表現かもしれないが、多くの人は誰でも自らを成長させるための「学び」を自ら選択することができる。その選択することができるフィールドを与えてくれるのは、子供のうちは大人や社会である。

2020 年春からはじまった「とかち創生学」は、本別町という地域社会がコミュニティスクールという枠組みを用いて、産声を上げた。

Ⅰ.2 「探究」とは、答えを探し続けること

「総合的な探究」学習は、正式には今年度（2022 年度）から始まったカリキュラムであり、本別高校では先駆的に取り組んで来たことになります。

スマートフォンが世の中に登場した 2006 年から約 10 年間で、私たちが目の当たりにする情報量は実に 2,170 倍にもなったと言われています。ますます、あふれる情報と選択肢がある中で、これからを生きる子供たちは「自ら考えて選んで決める」生き方をすることが求められます。

高校生は、親世代である大人たちが生きてきた時代に見てきた景色とは全く異なる時代を生きています。だからこそ、「とかち創生学」は、悩んで模索して、解決策を生み出すための力を養うことを大切にした授業の設計をしてきました。

Ⅱ 「とかち創生学」について

Ⅱ.1 「とかち創生学」は生きる力をつける授業

「とかち創生学」は、人生 100 年時代を生きる社会人としての基礎力を身に付けることを目指した学びのカリキュラムを想定しています。

具体的には、①前に踏み出す力、②考え抜く力並びに③チームで働く力を伸ばしていくことを目指しています。

Ⅱ.2 「論理的」であることをあきらめない

「とかち創生学」が拘っているポイントは、「論理的（ロジカル）」であること。論理的であることは、すべての物ごとに応用できます。勉強はもちろん、ものづくりにも、会社経営にも、スポーツにだって応用できます。様々な分野で活躍している一流の人たちは、自らの「道」を論理的に極めている方ばかりではないでしょうか。

だから、「Why so?（それはなぜ?）」や「So What?（だからなに?）」を繰り返し問いかけていきます。

3 芽生え始めた「一歩」

3.1 自分の進路を自分で決められた

「とかち創生学」では、まだはじまって 3 年程度なので、これから社会に出ていく生徒達が大半ですが、その中でも大学進学や就職などにおいて、「とかち創生学」で学んだことが活かされた、といううれしい声を少しですが聞くことができます。

また、進路を決める上で、「将来は地元に戻ってお菓子屋をやりたい」という夢を持ち専門学校に進学を決めたというようなケースもでてきています。

まさに、小さな一歩ですが、きっと地域にとって大きな一歩へとつながっていくものと確信しています。

3.2 行動変容が起き始めた「学校」と「地域」

コミュニティスクールの部会として提供する「とかち創生学」では、さほど意図していなかった変化が起こり始めていると感じています。

例えば、「学校」は、「とかち創生学」を提供するために、オンライン授業を実施することができる環境を整え、デジタルデバイスなどを積極的に活用するようになりました。

また、「地域」は、これまであまり関心のなかった（接点のなかった）地域の役場職員の皆さまや地域の事業者や農生産者の皆さまが、高校生たちの学びに関心をもち、一緒に学びの時間に伴走し始めてくれています。

3.3 未来につながる「一歩目のデザイン」

最後に、「とかち創生学」は、これからの地域にとって希望の一歩目となっていくものではないかと思っています。

なぜならば、「とかち創生学」を通じて、生徒だけでなく、学校や地域が小さな行動変容を起こしはじめ、「とかち創生学」という授業の枠組みを超えても活動しはじめる事例が現れてきたからです。「放課後SOY倶楽部」はまさにその一例で、「とかち創生学」で触れた地域の課題をもっともっと扱ってみたいという生徒と地域の事業者がコラボレーションして化学反応が起こった事例の一つです。

令和 5 年度の「とかち創生学」では、地域で本物の課題を持った本気の大人たちも参加して、探究の学びが行われていく予定です。

地域に芽生えた「小さな芽」を、これからも伸ばしていける総合的な探究を目指していきたいと思っています。